

飼料用米生産・利用拡大シンポについて

4 月 15 日ー16 日に、農林水産省主催の「飼料用米生産・利用拡大シンポジウム」が同省講堂にて開催されました。以前から飼料用米利用促進を行っている当協会としても、このシンポジウムに参加してきましたので、特に関心を持った点を報告します。

・このシンポには飼料用米に係る生産者、流通販売業者、配合飼料メーカー畜産農家、消費者団体、都道府県行政組織普及組織、国立研究開発法人農業食品産業技術総合研究機構、農林水産省等と幅広い関係者に呼び掛けられ、680 名の参加があった。飼料用米に関する、**全国的な関心の高さ**が理解できた。

・主催者の農林水産省よりは林大臣、小泉副大臣、皆川次官はじめ関係幹部より飼料用米拡大という極めてはっきりとしたメッセージが発信され、**省をあげての事業推進という意気込み**が伝わった。「この流れがいつまで続くか？」という質問に対しては柄澤農産部長より「米を続けるための新たな需要安定策として、**選択肢が飼料米しかない。**」という答えが全てを表していた。

・採卵鶏での飼料用米利用例として「飼料用米を給与して生産した鶏卵のブランド化について」という演題で農事組合法人 会田共同養鶏組合 会長理事 中島学氏が講演された。**飼料用米を給餌したメリットとして(1) 鶏卵のコレステロール値が下がること(2) オレイン酸、リノール酸とも高まること**、が報告された。**コスト削減をはかることと、米たまごという銘柄卵を確立することが鍵**となる。

・「飼料用米の豚及び鶏への給与技術」国立研究開発法人農業食品産業技術総合研究機構、畜産草地研究所領域長 阿部 啓之 氏の報告によると、

(1) 採卵鶏の場合、一般的に利用可能と考えられる飼料用米の配合水準は飼料中で **30%は可能**。これは農場での実証試験において飼養成績、卵質、成績を低下させないことが確認できたレベルである。

(2) 研究所の飼養試験から得られた配合上限値は飼料中の配合比率として**最高 60%が可能**であり、**トウモロコシを 100%飼料用米に替えることも可能**となっている。

・需要者である生協関係者よりは**非遺伝子組み換えトウモロコシに替わるもの**としての飼料用米という実情も報告された。

【日鶏協回覧板】 発行者：一般社団法人 [日本養鶏協会](#)

〒104-0033 東京都中央区新川二丁目 6 番 1 6 号馬事畜産会館内 (5 階)

TEL : (03) 3297-5515 FAX : (03) 3297-5519

発行日 2015 年 4 月 20 日

編集・発行責任者：島田博(fuwatama@jpa.or.jp)